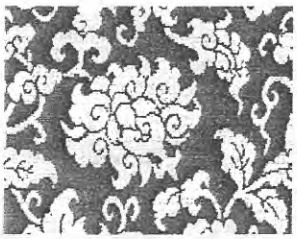
NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 4
2003．2．10



・理事挨拶
・報告－東文研／イクロム主催「紙の国際研修」協力プロジェクトに参加して
・世界の修復界は今－－アメリカ－－
・シリーズ 保存修復の現場から
「尽きることのない興味、それが紙と私の関わりです」
・書籍紹介『キリンヤガ』
・JCP 事務局通信

ご 挨 拶

立春を迎えて厳しい寒さの中にも日差しの濃さが感じられるようになりました。

ご挨拶が遅くなりましたが、昨年夏から増澤文武さんとともに理事に就任いたしました伊原惠司です。専門は建築で、文化財建造物の保存修理の仕事に携わって、いつの間にか半世紀近くになりました。その間に三輪理事長や八木三香さんとお付き合いが出来たのが、今回JCPにお世話になるきっかけになったようです。

文化財の種類の多さに比例して、それを修理する方法も多様であることは言うまでもないことですが、共通する基本理念は現在ある姿を維持継承することで、修理技術の主役は伝統的な技法といえます。製作当初の技術や、伝統技法の変遷は修理の実際を通して検証できるもので、修復に当たる技術者は伝統技法の体系付けという学術性と、変遷の考察を通して、正しい修復作業と技法の継承を行う専門性が要求されています。

しかし、文化財の保存には修理という臨床的な処置以前に、たとえば美術品の「虫干し」、建造物の「煤払い」などの保存環境の維持と管理がもっとも肝要であることは昔からよく知られるところで、これには一般の人たちの協力が不可欠となります。文化財の保存が多くの人たちの協力で成り立ち、その中で修復の作業がどのように行われているか、伝統的手法とは？　を知ってもらえる場を出来るだけ増やして、この仕事に参加してくれる新戦力を育てていくことが必要だと考えます。

情報公開、機構改革、規制緩和と急激に変革を目指す社会情勢のなかで、NPOという組織はいろいろな意味で存在感が大きくなるでしょう。私たちは実務家として、その要請に対応できる体制を整備することが急がれます。たった一つの取り柄である「年の功」がどれほどお役に立てるか分かりませんが、微力を尽くしたいと思います。

特定非営利活動法人　ジェー・シー・ピー
理事　伊原　惠司

報告

東文研／イクロム主催

「紙の国際研修」協力プロジェクトに参加して

三浦　功美子（NPO JCP 事務局スタッフ）

東文研（独立行政法人文化財研究所　東京文化財研究所）とイクロム（ICCROM）の主催する「紙の国際研修（International Course on Conservation of Japanese Paper)」が、平成14年10月1日～18日の3週間の日程で東文研で行われた。

研修生は9名。オーストラリア、アメリカ、チリ、スウェーデン、マルタ、リトアニア、ネパール、シンガポール、ベトナムの国々からの参加であった。皆さん自国で保存、修復の仕事に携わっている方々である。

この研修会は、海外の保存・修復者に、日本美術品の構造・素材や日本の修復技術を紹介することで、在外日本美術品の保存に相互理解を深めていこうという趣旨で行われている。今回は「紙」の研修であったが、前年度は「漆」だった。

この3週間の研修内容は、大きく分けて講義、実技、見学の3つから構成されている。今回NPO JCPは、東文研から実技部分の実演者としての派遣依頼を受けた。

今回のプロジェクトは、東文研と協議した結果、修復の技術や損傷の応急処置などの実践的な内容を中心にすることになった。そのためJCPとしては、現在修復装 潢 に直接携わっている技術者を中心として実演者を構成することとした。しかし、実技の時間は1、2週目は午後1～5時、3週目は午前10時～午後5時までの12日間の日程である。皆さんそれぞれの工房で自分の仕事を抱えているので、3週間研修に懸かりきりになることは無理であった。そのため、1～3日ずつの交代で行うことにした。但し、日ごとに教える人が替わると内容の継続性が難しくなるため、3週間通して全体をまとめていくコーディネータを中心として、実技を行う技術者の1人または2人の構成にした。プロジェクトリーダー兼実技者NPO JCP副理事長　大林賢太郎氏、コーディネータ　三浦功美子、実技者としてお願いした会員は、鈴木裕氏、島田達生氏、荒木史氏、竹内進一氏、竹内朋世氏、鈴木晴彦氏。このメンバーで実技を行うこととなった。補佐としてボランティアを募集したところ、会員　金子真紀氏、村上直子氏、杉下彩氏の協力を得た。

7月の中旬に大林氏から、相談をしたいことがあると私宛に電話が掛かってきた。実は「紙の国際研修」の実技のコーディネータをやってくれないかとの依頼であった。実技者のメンバーは大方決まっていた。後はコーディネータをだれにするかだった。私は会員ではないのだが、他の会員より時間の調整が容易だった。話があったときは、修復の仕事はしていたが教えるということは未経験であったので迷った。今までの経験を説明し実演していけばよいだけで、実技者のメンバーと協力して作り上げていくことで、素晴らしい経験になるはずだと説得され、承諾をした。

参加した研修生の皆さんと（中央筆者）。

そこから10月2日までの期間は実技の構成・調整、使用する道具材料の準備などに追われる日々だった。

実技の構成は、第1週目は、装 潢 作品の理解。装 潢 作品の掛軸、巻子（かんす、巻物）、屏風、冊子の構造と使われている素材、材料についてと、掛け軸、巻子の取り扱い。第2週目は、基本的な装 潢 技術の実習。紙継ぎ、本紙欠失部分の補紙、裏打ち。第3週目、装 潢 作品の損傷についての考え方と、その応急処置について。

10月2日、緊張の初日は糊炊きから始まった。私は緊張から、周りの方が面白がるほどカチンコチンに固まっていた。自己紹介の時は頭の中は真っ白でどんな挨拶をしたか覚えていない。

装 潢・修復で使用するベースとなる小麦粉澱粉糊を、実技者島田氏の実演のもとに研修生と一緒に炊いた。

2日目から装 潢 作品の構造の理解ということで、各工程構造の模型を見せながらの説明と、掛軸、巻子の取り扱いの実習を行った。この3日間は竹内進一氏、朋世氏の実技担当であり、やはりかなりの緊張をしていた。私は前日と打って変わって余裕の大きな笑みを浮かべ、大丈夫よと励ましていた。

研修生からは、説明をしている間にも矢継ぎ早に質問が

飛んできた。メモを取る音、質問の声、答える、カメラのフラッシュ、研修生のものすごい集中力である。その中で皆さんが特に興味を引いたのが屏風の蝶番（つがい）部分の構造模型と巻子の紐の付け方だった。傷みやすい箇所であるが、表面からは構造が分かり難く、対処の仕方に悩まされるところである。

装 潢 作品は紙を重ね合わせて出来ているためデリケートなものなので、取り扱いの拙さから劣化の促進や損傷を拡大することがある。慣れるために取り扱いの実習を入れたのだが、時間がそれほど取れなかったので、第３週に再度時間を取ることにした。

第２週目、基本的な装 潢 技術の実習。前半の２日間は荒木氏とともに紙継ぎ、本紙の欠失部分の補紙の実習を行った。最初に７種類ほどの素材、厚みの違う紙を用意した。その紙を喰い裂いてもらい、それぞれの強靭さや繊維の長さの違いなどを体験の中で感じてもらおうとしたのだが、こちらの意図とは異なった反応だった。喰い裂くという作業に皆さん熱中してしまい、荒木氏が途中で説明を入れても、一応は頷くがまたすぐに喰い裂きに没頭していた。紙継ぎは、四苦八苦はしていたが、修復の繊細な仕事をしているので初体験であるのにそれなりの仕上がりであった。

水曜日は東京国立博物館の見学。

後半２日間は鈴木晴彦氏とともに裏打ちの実習。この頃が研修生の疲労もピークに達していた。説明を聞いている時の目が宙を浮いていることが見られた。数種類の接着剤、裏打紙を使い、裏打ちをした。接着剤や裏打紙の違いによる接着力の違いや、裏打ち後の本紙の状態の違いを体験してもらった。皆さん裏打ちは経験があるので、それなりにこなして形になっていた。

掛軸の折れについて説明する大林氏。

第３週目の３日間は、装 潢 作品の損傷についての考え方、その応急処置について。装 潢 作品の損傷の原因や状況を理解して貰い、その上での応急処置が可能か不可能かの判断することと、応急処置の方法についての、実践的なことを行った。１、２週目で時間が足りなくて十分ではなかったことの補習と、全体を通しての質問にあてた。

研修生は、週末からの３日間を紙漉きの見学旅行で高知に行っていた。休みなしのハードスケジュールでボロボロになっているのかと心配していたが、２週間室内に閉じこもっていたので、逆に外に出てリフレッシュできたようで、パワーは回復していた。

１日目、火曜日は鈴木裕氏。掛軸、巻子の折れの原因や発生する損傷についての説明と、対処方としての折れ伏せ

用語解説

・イクロム（The International Center for the Study of the Preservation and Restoration of Cultural Property）：文化財保存修復研究国際センター

ローマに本部がある国際政府間機構。世界の100カ国近くが加盟。加盟国からの分担金をもとに、文化財保存の専門家を育成し、資料や情報を収集して提供すると共に、文化財の保存を広く啓発することを目的としている。数多くの研修コースによる文化財保存専門家の育成を事業の柱としている。

・装 潢（そうこう）

表装、表具。書画を様々な形式で装丁すること。掛軸、巻子、屏風、襖、折れ帖等。その書画のことを総称として本紙（ほんし）という。本紙の材質は、紙とは限らない。

・喰い裂き

紙をちぎって繊維をけばだたせること。

・紙継ぎ

装潢作品の大きさは様々であり、１枚の紙の長さでは裏打ちが出来ないものが出てくる。紙を糊で継ぎ合わせて長くすることで、様々な大きさの作品に対応できるし、紙の無駄も少なくてすむ。装潢技術の中で基本的な作業である。

・補紙

紙の本紙の欠失部分に、形を合わせた紙を当てはめて繕うこと。本紙が絹の場合は補絹（ほけん）という。

・裏打ち

紙や絹で出来ている本紙は、それだけではとても脆弱なので取り扱いが難しい。そのため裏面に紙を貼ることで補強する。紙に糊をつけて貼ることを裏打ちという。装丁の形によって裏打ちの回数や紙の種類が異なる。

・屏風の蝶番（つがい）

屏風は、木骨に何層もの紙を貼り（下張り）、表面に本紙を貼ったパネル（パネルの枚数の単位は扇〈せん〉）をつなぎ合わせて折り畳めるような形にしたもの。各扇をつなぎ止める蝶番として紙を用いる。屏風の蝶番は前後に自由に折り畳むことが可能である。

・折れ、折れ伏せ

掛軸、巻子は鑑賞するときに広げ、収納するときは巻いておく。広げたり巻いたりすることで、作品自体に負担がかかるため巻く方向と平行に折れが生じてくる。その折れを緩和させるため、裏面から折れた部分に沿って細長い紙を貼って補強する折れ伏せという方法がある。

・太巻き芯

太巻添え軸、太巻きともいう。掛軸、巻子は軸棒に巻き込んで収納するので、その軸径を太くすれば折れの緩和になる。そのため本来の軸の上に桐材製の太巻き軸をかぶせて軸径を太くして巻き込む。

の実習を行った。それと、第1週目で巻子の紐付けに非常に興味を寄せていたので、今回は掛軸の掛け緒の付け方を実習した。掛軸を掛けるための紐が切れているために、掛けて展示出来ない状況が多い。この紐の付け方は、実はなかなかの曲者である。鈴木氏の実演を見ていると簡単に出来そうに感じるのだが、実際自分でやるとなかなか上手く出来ない。実は私も自らするのとは異なり、教えているうちに分からなくなり、情けない始末だった。

2、3日目は大林氏。掛軸、巻子の取り扱いの復習と掛軸の仮の太巻き芯を作った。掛軸の折れを少しでも緩和させるために巻き芯を太くする。その仮の巻き芯を各自作った。

最後に全体を通しての補足説明と質問について答えた。質問では、自国のコレクションの問題についてのアドバイスや、修復方法の違いについてなどが出た。大林氏が丁寧に答えていた。研修生の実技の反応は比較的好評であったようである。

10月17日午後5時12日間の実技の全日程は無事終了。この夜のビールはとても美味しかった。

全体を通して、何故という質問が多かった。何故この材料道具を使うのか？　何故この工程が必要なのか？　この作業の意味は何なのか？　日本人だったら、どのようにこの工程をやればいいのか？　この作業の方法はどうすればいいのか？　という質問になるのかなと違いを感じた。そのように今まで思ってもみなかったことが、質問で飛んできて、答えに詰まってしまったり、研修生の四苦八苦している実習の中で、分かり易い説明が出来ずに戸惑ったりと大変だったが、非常に充実した3週間ではあった。

そして、短い準備期間の中での不備や甘さからの、反省点はいろいろあった。このことは十分に検討反省して、今後にしっかりと生かしていきたいと思っている。しかし、別々の工房で仕事をしてきた者同士が集まり、修復、装潢の工程や方法などを率直に意見を出し合い、実技のプログラムを作り上げていけたことは、素晴らしいことだと感じた。そこに参加できたことはとても勉強になり感謝している。

今回のプロジェクトは、直接係わった実技者、ボランティアのメンバーだけではなく、大勢の方々にご尽力を頂きました。とても感謝しております。本当にありがとうございました。

プロフィール
東京藝術大学大学院　美術研究科保存科学専攻　修了。
1991年4月～2002年4月　㈱半田九清堂
現在　フリー

保存修理の現場から

（インタビュアー：浜名純／三浦功美子）

「尽きることない興味、それが紙との関わりです」

東京藝術大学大学院　美術研究科助教授　稲葉　政満さん

イギリスの名著の翻訳から始まった

岐阜大学農学部の助手を務めていた1980年代後半のことである。東京藝術大学美術学部から声がかかった。保存科学の研究室からである。平山・現学長が当時、「修復」の教授を兼任しており、「これからは紙の研究者が必要だ」というのがその理由だった。

稲葉さんは、東京大学大学院農学系研究科の大学院博士課程に学び、紙の研究をしていた。といっても、例えば「放射線を使ってパルプの強度を上げるには、どうしたらよいか」といった研究が主で、文化財の保存や修復という分野とは少し異なっていた。「正直に言って保存科学という分野があることを知らなかった」ほどである。が、無理もない。今でこそ文化財関係の学科を持つ大学は多くなったが、当時は東京藝術大学を除いては、奈良大学に学部があったくらいだ。

とまれ、それから稲葉さんの紙の保存性に関する長い研究生活がスタートするのである。

まず最初に手がけたのは、G. Thomasonの名著『The Museum Enviroment』の研究室での翻訳出版だ。『博物館の環境管理』という邦題で、1988年に上梓した。この頃、日本図書館協会の資料保存研究会（現・資料保存委員会）で、話す機会が与えられた。具体的には、「資料保存の基礎技術ワーキンググループ」で「資料保存のためのやさしい科学」を5回にわたって講義したのである。話は飛ぶが、それが基になって2001年、『図書館・文書館における環境管理』という本が完成した。図書館などでは、資料を健全な形で利用者に見てもらう義務があるが、そのための「保存環境」はいかにあるべきか、温度、湿度、光をはじめ、他

の物質からの影響や生物被害まで種々の環境因子について考察した、いわばこれまでの研究の集大成ともいえるものであった。

酸性紙と和紙をめぐって

「私がここに移ってきたときは、ちょうど酸性紙問題がクローズアップされはじめたときでした。特にアメリカでは大問題になっていました」。紙を大量に、手間をかけずに作るために、一世紀近く前から、紙の繊維ににじみ止めの酸性の薬品を入れて抄きあげる技術が確立した。それが、100年の歳月を経て、ぼろぼろになったのだ。「それまではただ本を本棚に保管しておくだけでよかったのですが、使わなくても崩れていくようになったんです」というわけだ。アメリカでは本の8割以上がやられた。「もっともアメリカはお金があったせいで暖房をふんだんに使うので、痛みがひどかったが、まだ貧しかった日本はそれほど被害は大きくなかった」。そういって笑う稲葉さんだが、「あと何十年かしたら日本の図書館で大きな被害が出てくることもあり得るわけです」という。

それを防ぐためには、紙質をアルカリ性紙に変えることはもちろんだが、一つ一つの環境因子をチェックして保存の最適環境を考えなくてはならない。こうして紙の保存性に関する研究がライフワークとなるのである。「酸性紙とアルカリ性紙が直接触れると変色が大きくなるのですが、最近そのメカニズムが分かりはじめました」という。

稲葉さんは和紙の研究の第一人者でもある。1995年に和紙の調査のためイギリスへ赴いた。なぜ、和紙なのにイギリスなのだろう。「明治初期、イギリス政府は、あらゆる種類の和紙を本国に持って帰るよう指示しました。それこそちり紙から高級紙まですべてなのですが、その実物が偶然博物館に忘れ去られて現存していたのです」。

劣化の具合はどうなのか、当時の製法は？　など調べているうちにあっという間に半年が過ぎた。和紙は薄くて強い、そして、洋紙と最も異なるのは、ラッピングや戸・障子などの建材といった「書いて保存する」という行為以外の分野でも幅広く使われるのが特徴だ。「和紙の技術発展史的な側面からも見ていけたらと思っています。とにかく紙は興味がつきません」と稲葉さんは、笑顔を絶やさない穏和な語り口で語りかけるのである。

紙資料の保存に貢献したい

「地球環境」をめぐるいろいろな問題が人類にのしかかっている。人口増大と温暖化、それに伴う砂漠化や森林の減少などなどだ。20世紀初めには、陸地の3分の1以上は森林だった。それが2020年ごろには、7分の1になりそうだという。IT化は、ペーパーレス時代を招くどころか、逆に紙の消費量を増やした。紙は木から作られるのだから、当然、地球環境問題にも直結してくる。

稲葉さんは言う。「繊維をリサイクルして再生紙を使えばいいといった単純なことでは解決できません。明らかに強度的に弱くなるし、保存という面だけからいえば、バージン・パルプの良い素材を使った方がいいのです。図書館や美術館用だけに、いい素材を使用したスペシャル・エディションの本を作るということは現実的に難しいでしょう。単に再生率を上げればいいというわけにはいきません。再生率を上げれば、また別の問題が発生してきます。リサイクルの問題はこれからの大きな課題となってくるでしょう」。「紙自身の環境」、それを保管する「美術館の環境」、さらに「地球の環境」を視野に入れた保存が今望まれているといえよう。それを踏まえて、稲葉さんは「保存科学の研究を通して、紙資料保存に少しでも貢献したい」と次のステップを見据える。

そして、最後に「たとえば、漆の修復などは、なかなか外国人に理解されないところがありました。彼らは可逆性を重んじます。漆を漆で修復したら、可逆性がなくなるというわけです。そこをきちんと説明できる人、つまり海外の人と同じ土俵に立って、修復や保存のことをしっかり語れる人が育って欲しい」と若い世代にエールを送るのである。

○プロフィール
- 1953年生まれ。
- 1985年、東京大学大学院農学系博士課程修了、岐阜大学農学部助手を経て、東京藝術大学美術部助手に。1995年より現職。
- 文化財保存学専攻、著書に『図書館・文書館における環境管理』、『文化財における保存科学入門』（共著）、『考古資料分析法』（共著）など。
- 現在、文化財保存修復学会運営委員、マテリアルライフ学会常任理事。

世界の修復界は今　第3弾　アメリカ

「アメリカにおける保存修復教育」

㈱絵画保存研究所　大川　美香

アメリカにおいて、総合的に修復を学べる修士レベルの学校としては、State University College at Buffalo, University of Delaware and Winterthur Museum, New York Universityの３つのプログラムが挙げられる。アメリカの修復家の多くはこれらの学校のどれかを卒業している。

アメリカの学校の特徴は、入学当初から専門に分かれるのではなく、様々な分野の制作技法、修復技法、科学の基礎をまず学び、その後１つないし２つの専門を選択してさらに勉強するという点である。分野としては、絵画、彫刻、紙、テキスタイル、オブジェクト、写真などがあり、オブジェクトであれば、石、ガラス、金属、木、象牙などさらに専門的な領域についてそれぞれの専門家から習うことになっている。そのため、授業によっては毎回講師が変わる場合もある。アメリカのプログラムでは、様々な地域から訪れる何十人もの講師が関わって教育を支えている。また、学生が美術館や工房などに出向いて行われる授業も多い。

学校への入学の条件は、美術史、科学、実技の基礎を備えていることである。各学校とも学生数は一学年５～10人と少人数制であり、入学はかなり難しい。学生の大半はアメリカ人であるが、外国人も数名いることが多い。学生の年齢は２、30代が多いが、40代のこともある。卒業までは３ないし４年かかり、最終学年はインターンとなっている。

少人数制であるが、上級レベルの専門のクラスとなると、１クラス数名の受け入れしかなく、希望者が多い場合は競争となることもある。上級クラスでは、学校のコレクションの作品に加えて、美術館の作品や個人コレクターの作品を教授の指導のもとに修復していく。

学校で行われる教育は、どちらかというと実技よりも講義や研究に重点が置かれている。実技を充実して行えるのは、最終学年のインターン時になる。インターンは、美術館や個人の工房で、指導者のもとに行われる。美術館であれば、修復の他に、作品の貸し借りや展示などの仕事にも関わることになる。現在は修復家のポストが少ないので、学校終了後は、またインターンやフェローの経験を重ね、就職を探すという状況になっている。アメリカは、ヨーロッパなどにくらべてインターンやフェローの受け入れに協力している修復機関が多いようで、イギリス人、ドイツ人、デンマーク人、スウェーデン人などの研修生を多く見かける。

アメリカでは、美術館などがワークショップを主催したり、地域ごとに修復に関する小さな発表会が行われたりすることが多い。また、AIC(The American Institute for Conservation of Historic and Artistic Works)の定期刊行物が充実しており、インターネットで検索が容易に行える。修復家になった後も、情報収集や交換がしやすい環境になっている。

アメリカの修復教育プログラムについては、AICのホームページの「Becoming A Conservator － Conservation Training in the United States」(http://aic.stanford.edu/become/contrain.pdf) に詳しく述べられている。

大川美香
1994年3月　東京藝術大学大学院美術研究科保存科学専攻　修了
1994年8月～1996年5月　ニューヨーク大学大学院修復科(Conservation Center)
1996年6月～1997年8月　グッゲンハイム美術館修復室
1997年9月～1999年8月　ナショナル・ギャラリー・ワシントンDC修復室
現在　㈱絵画保存研究所取締役

JCPからのお知らせ

NPO JCP第1回シンポジウムのお知らせ

すでにニュースレター、メールマガジンなどでお知らせしていますが、NPO JCPでは、来る３月１日（土）第１回目のシンポジウムを計画しています。当日参加も可、ですが、定員は200名ですので、できましたら事前のお申し込みをお願いいたします。事前申し込みをされた方を優先して入場いただきます。

ＮＰＯ　ＪＣＰ　第１回シンポジウム

日　時：平成15年３月１日（土）
10:30～16:20（10:00受付開始）

場　所：東京都美術館
（JR上野駅公園口出口より徒歩７分上野公園内）

テーマ：「文化財保存支援活動」
－NPO JCPが果たす役割－

講　師：三輪　嘉六（NPO JCP理事長）
井上　敏（NPO JCP会員／桃山学院大学講師）他

事例報告：　大林　賢太郎（NPO JCP副理事長）
　　岡村　一幸（臼杵市教育委員会）
　　三浦　功美子（NPO JCP事務局スタッフ）
パネリスト：神庭　信幸
　　（東京国立博物館企画部保存修復課課長）
　　谷　久光
　　（(財)文化財保護振興財団専務理事）
　　増田　勝彦（昭和女子大学教授）
　　他

後　　援：（財)文化財保護振興財団
　　文化財保存修復学会
協力団体：考古科学シンポジウム
参加申し込み：メールまたはファックスで
①住所②氏名③連絡先電話番号／E-mail④所属⑤会員種別を下記連絡先までお知らせください。
（非会員でも参加歓迎します）
※詳細は、同封のパンフレットをご覧下さい。

書籍紹介

『キリンヤガ』

胸いっぱいの感動とイマジネーションで描く未来叙事詩

マイク・レズニック著／内田昌之訳・ハヤカワ文庫SF・1999年5月刊

絶滅に瀕したアフリカの種族、キクユ族のために作られたユートピア惑星「キリンヤガ（キクユ族の神、ンガイのいる聖なる山のこと)」。その惑星で、かつてのキクユ族としての伝統的な生活を守る祈祷師・コリバ（実はインテリなのだが）の目を通して文明とは何か、文化を守るということは何かということを、切々と詠い上げるオムニバス長編SFである。

隔離された世界にも容赦なく押し寄せる文明。それに対して、頑なまでに文化を守ろうとするコリバ。新しい「知識」に流されようとする一族の民。その3つが互いに対立しながら、小さな物語が重なり合うように物語は進行していく。最終的にこのユートピアは、コリバ＝キクユ族としての文化は崩壊し、文明という「神」に支配されていく。作者はその対立を、どちらに肩入れするでもなく淡々と描き、そのため我々読者の心も、それぞれの考えの間で揺れ動くことになる。そして自分の答えを見出すために、いつの間にかもう一度考え直している自分に気づく。

「ひとたび伝統にそむけば、この世界はキリンヤガではなくなって、人々が自分たちではないもののふりをぎこちなく続けるもうひとつのケニアになってしまうのだ」

こう断言するコリバをどう思うかは別として、これほど強烈に伝統と革新の対立を描いた小説も珍しい。進んだ文明は、川が流れるように容赦なく流れ込んでくるが、それをせき止めることは容易なことではない。伝統的な生活の崩壊は、民族としてのアイデンティティーの終焉を意味する。しかしまた、流れるがままにすることは悪いことなのか。発展しない、昔のままの世界は本当にユートピアなのか。改めて考えさせられる問題である。そういった意味では、文化財の保護・修復に携わっている人たちにこそ、読んでもらいたい作品である。

（嶋根　隆一）

JCP事務局通信

事務局日々

2002.11.5　山領絵画修復工房訪問（NLNo.3インタビュー記事取材のため）（八木、浜名、三浦）
2002.11.9　国際紙の研修プロジェクトメンバーによる反省会（谷中・三浦功美子邸にて）
2002.11.11　東京国立博物館浮世絵マウント支援（大林、島田）
2002.11.24～30　韓国中央博物館壁画修理協力（大林）
2002.12.3　大阪にてシンポジウム打ち合わせ（増澤、八木）
2002.12.4　京都にてITグループ会議（大林、八木、他）
2003.1.6　仕事始め
2003.1.13　JCP理事・運営会員会議
2003.1.14　東京国立博物館浮世絵マウント支援（大林、島田）
2003.1.17　東京藝術大学稲葉先生インタビュー（三浦、浜名）
2003.1.20　パイロット㈱ペンステーションにて収蔵品の保存展示の相談を受ける。（大林）
2003.1.21　東京国立博物館浮世絵マウント支援（大林、島田）
2002.1.22　(有)紙資料修復工房訪問（三浦、八木）
2003.1.26　考古科学シンポジウムにてJCP理事　増澤文武氏講演
2003.2.4　東京国立博物館浮世絵マウント支援（大林、島田）
2003.2.9～15　韓国中央博物館壁画修理協力（大林）

JCPからのお知らせ

「NPO JCP NEWS　情報スタッフ募集のお知らせ」

事務局では、NPO JCP NEWSの編集委員会を設置し、より充実した情報を会員の皆様にお伝えできるよう計画しています。つきましては、日本各地で文化財の修復や保存に関連した情報をお寄せくださる会員を募集いたします。スタッフとなってくださった会員とは、メーリングリストにて意見交換をしたいと思います。どのような情報が現場に役立つか、現場の方々の声をぜひ聞かせていただきたいと思います。

一緒に紙面を作ってみませんか？

ご希望の方は、メールまたはファックスで①住所②氏名③連絡先電話番号／E-mail④所属または専門分野をお知らせください。

「日中共同　敦煌莫高窟第53窟壁画修復協力プロジェクト登録技術者として参加のお願い」

ニュースレターでもお知らせしておりますが、現在NPO JCPでは、東京文化財研究所と敦煌研究院との壁画保存第4期日中共同研究に協力する形で、技術者を派遣しています。平成14年度は壁画の調査と修復材料の検討のため、2人の技術者を派遣しました。平成15年度はその2度目にあたり、7月～9月の間に3人の技術者を派遣する予定です。現在田畔、犬竹という技術者が中心になっていますが、次世代を担う技術者を広く探しています。そこでまず、敦煌の壁画修復に興味のある方、1カ月の滞在もいとわないという方、人材リストの登録にご協力をお願いします。登録してくださった方全てを敦煌へ派遣できるわけではありませんが、登録してくださった方にはこのプロジェクトの活動状況を逐次お知らせすると同時に、実際に派遣される技術者と共に講習などを受ける機会を提供いたします。

登録の条件は以下の通りです。

Ⅰ. 登録の条件

1. 当会の登録会員であること
2. 平面／立体の文化財修復の経験がある修復技術者。あるいは、関連保存科学分野で実績のある人。
3. 時間的体力的に1ヶ月日本を離れることが可能な人。
4. 協調性のある人。
5. 中国語ができればなお可。

なお、派遣に際しては交通費、宿泊費、実費支給、日当些少（額は未定）

Ⅱ. 登録方法

メールあるいはファックスにて、①お名前②連絡先③電話番号④専門分野⑤職業⑥実績を事務局までお知らせください。

NPO JCP事務局連絡先：
E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org
FAX：03-5832-5440

ご入会ありがとうございました。

（平成15年2月10日現在入会者数）

□登録会員　105名（運営会員を含む）
□一般会員　100名
□賛助会員　13件

㈱岡墨光堂
(有)坂田墨珠堂
昭和不動産
靖斎文化財保存研究所
日本通運株式会社美術品事業部
羽生　卓史
百元　節
㈱文化財保存
溝川商店
歴史遺産研究センター
他個人3名
（アイウエオ順・敬称略）

ご寄附をありがとうございました。

・鈴木晴彦様　・志村正治様　・渡邊務様
・伊達仁美様　・増澤文武様　・島田達生様

NPO JCPの活動に参加してみませんか？

□ **登録会員**：年会費　7,000円
　文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
　登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で，文化財に直接関わる専門家とは限りません。

□ **一般会員**：年会費　5,000円
　この法人の目的に賛同し、支援する個人。

□ **賛助会員**：年会費　一口50,000円
　この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典　・季刊情報誌の送付
　・講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL/FAX：03-5832-5440
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL:www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用下さい。

・郵便振替　00120-4-10545　NPO JCP
・みずほ銀行　根津駅前支店　普通預金　1727893

NPO JCP NEWS
第4号
2002年2月10日発行
特定非営利活動法人　ジェー・シー・ピー
〒113-0031
文京区根津2-18-6-102
TEL/FAX：03-5832-5440
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org

〈理　事〉
三輪嘉六（理事長・評議員）
大林賢太郎（副理事長）
増澤文武（評議員）
白井久明
伊原恵司（評議員）

〈評議員〉
三浦定俊
田畔徳一

〈編集協力〉　浜名　純（牧童舎）・嶋根隆一

〈事務局〉　・八木三香　・三浦功美子